

# 丘中学校遺跡

塩尻市立丘中学校改築工事  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992

塩尻市教育委員会

## 序

丘中学校遺跡は学校敷地およびその周辺に広がっており、これまでの数回にわたる調査により旧石器時代から中世に及ぶ貴重な遺跡として、市内はもとより県下を代表する遺跡としてよく知られていました。この度、校舎改築工事に伴い遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から工事に先立ち発掘調査を行なうことになりました。

発掘調査は8月下旬から10月上旬にかけて行なわれ、あいにくの台風と残暑に見舞われながらも順調に作業が進み、数多くの成果をあげることができました。

本調査を実施するにあたり、丘中学校校長浅倉勉氏をはじめとして学校関係職員の方々には大変お世話になり厚く御礼申し上げます。また調査と整理に携わられた調査員、作業員の方々に重ねて謝意を表するものであります。

平成4年1月

塩尻市教育委員会

教育長 平出友伯

---

### 一例 言

---

1. 本書は、塩尻市立丘中学校改築工事に伴い、平成3年8月29日から10月3日にわたって発掘調査した塩尻市大字広丘野村の丘中学校遺跡発掘調査報告書である。

2. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平成3年10月から平成4年2月にかけて行なった。作業の分担は次のとおりである。

遺構……整理、トレース：鳥羽、中村。

遺物……洗浄、註記、復元、実測、トレース：小林、市川、古厩、中村。

写真……鳥羽。

3. 本書の執筆は第IV章の遺物を小林が、それ以外を鳥羽がそれぞれ分担した。

4. 調査にあたり、丘中学校校長浅倉勉氏、同教頭米澤交平氏、ならびに学校関係職員、生徒の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼といしたい。

5. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

# 目 次

序	
例 言	
第 I 章 調査状況 .....	1
第 1 節 発掘調査に至る経過 .....	1
第 2 節 調査体制 .....	1
第 3 節 調査日誌 .....	2
第 4 節 遺跡の状況と面積 .....	3
第 II 章 遺跡周辺の環境 .....	4
第 1 節 自然環境 .....	4
第 2 節 周辺遺跡 .....	5
第 III 章 遺跡の概要 .....	7
第 1 節 過去の調査経過 .....	7
第 2 節 調査概要 .....	7
第 IV 章 調査結果 .....	11
第 1 節 遺構 .....	11
第 2 節 遺物 .....	17
第 V 章 結 語 .....	20

# 第Ⅰ章 調査状況

## 第1節 発掘調査に至る経過

塩尻市では現在、市内小中学校の改築事業を年次計画で進めているところであるが、その一環として市内広丘野村にある丘中学校の改築工事が実施されることになった。折しも丘中学校敷地およびその周辺は、これまでの調査により旧石器時代から中世に及ぶ丘中学校遺跡として、質・量ともに市内を代表する遺跡となっており、工事施工前に発掘調査を行ない、記録保存することになった。平成2年10月3日、市学校教育課塩原、青柳と平出遺跡考古博物館小林、鳥羽の4名は現地で調査区と調査時期の協議を行ない、併せて表上の堆積状態と破壊状況を調べるために試掘調査を実施した。平成3年8月21日、工事が2年後に先送りとなつたため、現況の施設を当分そのまま残す方針で調査範囲の見直しを行ない、現地で4ヶ所の調査区を設定した。

## 第2節 調査体制

団長 平出 友伯(塩尻市教育長)  
担当者 鳥羽 嘉彦(日本考古学協会員、市教委)  
調査員 小林 康男(日本考古学協会員、市教委)  
市川二三夫(長野県考古学会員)

参加者 小沢甲子郎、小松幸美、小松義九、清水年男、高橋烏億、  
高橋阿や子、中野久行、高橋タケ子、藤松謙一、山口仲司  
大和 廣、古瓶馨子、内川初雄、上条スミ江、唐沢晶子、  
小松淳子、志水安秋、清水夏子、手塚貞美、羽多野みね、  
松島まつ子、中村芳春。

事務局 市教委総合文化センター所長 武居 範治  
〃 文化教養担当課長 横山 哲宣  
〃 文化教養担当副主幹 大和 清志  
〃 平出遺跡考古博物館長 小林 康男  
〃 平出遺跡考古博物館学芸員 鳥羽 嘉彦

### 第3節 調査日誌

- 平成3年8月29日（木） 曇時々雨 現場へ機材搬入。
- 9月2日（月） 晴 重機による表土除去。II地区・III地区・IV地区西半域。
- 9月3日（火） 晴 重機による表土除去続き。IV地区東半域・I地区。
- 9月4日（水） 晴 本日から作業員参加による発掘調査開始。朝、横山文化教養担当課長より挨拶、小林博物館長より遺跡の概要説明、事務局より発掘日程、作業方法等の説明があったのち、機材準備、テントとトイレの設営。I地区およびII地区からジョレンによる遺構検出作業を開始する。市民タイムス・塩尻日報・中日新聞記者來訪。
- 9月5日（木） 晴 I地区・II地区・III地区遺構検出作業。各調査区に5m間隔の杭打ちをし、グリッド設定。I地区中央で土師器の内黒土器、須恵器多出。
- 9月6日（金） 晴 I地区、2・3区で方形竪穴住居址を検出し、第1号住居址とする。4区で数基の小竪穴検出。II地区、検出作業。III地区、2・3区で落ち込みを検出し、第2号住居址とする。
- 9月7日（土）、8日（日） 定休日。
- 9月9日（月） 曇 I地区、第1号住居址掘り下げ。4区の小竪穴群セクション図化。II地区完掘、全体写真。III地区、住居址掘り下げ。第2号住居址の北側床面に掘り込みで第3号住居址を検出。IV地区、杭打ち、遺構検出作業。
- 9月10日（火） 晴 I地区、第1号住居址掘り下げ、遺物取上。III地区、第2号住居址東西セクション図化。IV地区、検出作業。調査区南端よりチャート製の神子柴型削器出土。
- 9月11日（水） 晴 I地区、第1号住居址掘り下げ。III地区、第2・3号住居址南北セクション図化。IV地区、検出作業。
- 9月12日（木） 晴 I地区、第1号住居址セクション図化。III地区完掘。第2・3号住居址平面図測定。全体写真。IV地区、検出作業。
- 9月13日（金） 曇のち雨 I地区、第1号住居址遺物取上。IV地区、検出作業。台風による降雨のため、昼で作業中止。
- 9月14日（土）、15日（日）、16日（月） 定休日。
- 9月17日（火） 晴 I地区、第1号住居址および小竪穴群の平面図測定、写真。IV地区、南側に4軒住居址検出、第4～7号住居址とする。第7号住居址南壁で神子柴型石槍出土。
- 9月18日（水） 曇のち雨 I地区、調査区の精査。IV地区、住居址掘り下げ。北東隅で住居址検出、第8号住居址とする。台風による降雨のため昼で作業中止。
- 9月19日（木） 雨天中止。
- 9月20日（金） 晴 I地区、全体写真。IV地区、住居址掘り下げ。第5・7号住居址セクション図化。小竪穴セクション図化。

- 9月21日（土）、22日（日）、23日（月） 定休日。
- 9月24日（火） 曇 IV地区、第4号住居址、写真撮影。第5・7号住居址、写真撮影、平面図測図。第6号住居址セクション図化。
- 9月25日（水） 曙 第6号住居址、写真撮影、平面図測図。第8号住居址・小竪穴平面図測図。D-4から石刃出土。
- 9月26日（木） 曙のち雨 第8号住居址写真撮影。ローム掘り下げ。降雨のため翌日作業中止。
- 9月27日（金） 曙 IV地区南半域のローム掘り下げ。
- 9月28日（土）、29日（日） 定休日。
- 9月30日（月） 曙 IV地区ローム掘り下げ、全体図測図、全体写真撮影。I・II・IV区の一部を手作業により埋め戻し。器材片付け。
- 10月2日（水） 晴 重機による埋め戻し。I地区・IV地区北半域。
- 10月3日（木） 晴 重機による埋め戻し。II・III・IV地区南半域。機材撤収。本日をもって現場における全調査日程を終了する。

整理作業は10～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土品、諸記録の整理、報告書の図版作成、原稿執筆作業。

#### 第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
丘中学校	堺市大字広丘 野村 1302番地	校舎敷地	包蔵地	50,000m <sup>2</sup>	1,800m <sup>2</sup>	650m <sup>2</sup>	620m <sup>2</sup>	2,850,000円

第1表 発掘調査経過表

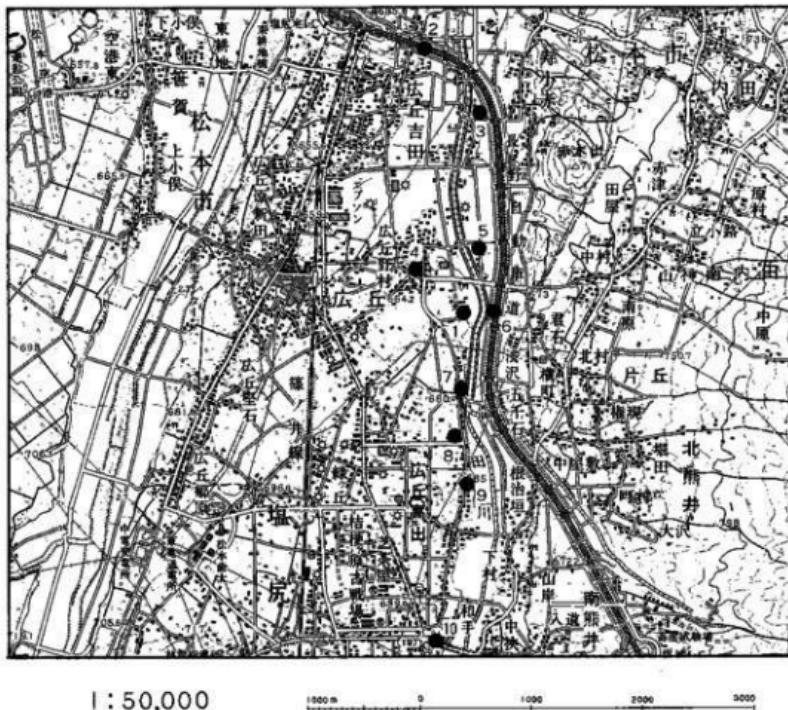
遺跡名	8	9	10	11～2	主な遺構	主な遺物
丘中学校	29	3	遺物整理・図面 作成・原稿執筆	発掘調査	平安時代住居址8 小竪穴5	旧石器時代 尖頭器・削器・石刃 平安時代 土師器・須恵器 灰陶陶器・鉄器 石器

## 第II章 遺跡周辺の環境

### 第1節 自然環境

丘中学校は塩尻市大字広丘野村地籍にあり、塩尻市の北部にある広丘野村・吉田・片丘地区を通学区としている。JR篠ノ井線広丘駅から東へ約2km、付近一帯に展開する水田地帯の中に南より延びる台地があり、その坂道を登りきった上位間に位置している。

この付近は塩尻市の東と西を北流する田川と奈良井川の二河川によって形成された河岸段丘の



1.丘中学校 2.吉田川西 3.吉田向井 4.野 村 5.花 見  
6.高 田 7.黒 巢 8.一 夜 窪 9.北 / 原 10.和 手

第1図 位置図

うち、両河川に挟まれた高位段丘面で、現在の市街地が展開する桔梗ヶ原面の北側段丘縁に位置する。段丘は洪積世末期の隆起運動の際、西側の奈良井川側が東側の田川側に比して差別的に隆起したために、北端の平面形態は尖頭状になり、あたかも松本平に張り出した岬の先端のような形状を示している。海拔は670m前後で、比高差5mの段丘崖をもって田川に臨んでいる。

段丘上には、ここから国道19号線と国道20号線の分岐点である高出交差点付近にかけて南北3km、東西300mの広範囲にわたって高出遺跡群が分布しており、旧石器時代から縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世の各時代に及んでいる。今回の調査対象となった丘中学校遺跡も旧石器時代から中世に至る複合遺跡であり、高出遺跡群の中でも最大級の遺跡である。

遺跡のある上位面は水田地帯となっている下位面と対象的に水利に著しく乏しいのが特徴的で、現在も水田は見られず、畑や果樹を中心とした土地利用となっている。角前や黒崖付近にみられる段丘崖の湧水が唯一の水資源と推定されるが、古代集落の経済基盤である水田は段丘上の集落を離れ、より田川に近い段丘面で行なわれていた可能性が強い。

## 第2節 周辺遺跡

丘中学校遺跡は松本平南端の田川を臨む段丘上に位置し、高出・野村地籍にまたがる高出遺跡群の最北端に位置する。以下、この遺跡群を中心に周辺遺跡を概観してみたい。

旧石器時代 田川上流の塩尻峠山腹を中心とした地域と並んで、市内では最もまとまった資料が得られている。今回の丘中学校では、ナイフ形石器、尖頭器、搔器、石刀、敲石、彫器、礫器が出土し、黒崖で尖頭器、北ノ原でナイフ形石器、尖頭器、有舌尖頭器、搔器、石刀、一夜窪で尖頭器、有舌尖頭器、和手で尖頭器がそれぞれ出土している。狭範な調査内での出土であり、高出遺跡群の特性を示す時期ともいえよう。

縄文時代 縄文遺跡の密集地帯である東方の片丘丘陵に比べ、平野部となる田川流域における遺跡数は極めて僅少となり、高出遺跡群中では、黒崖で早期山形押型文土器、一夜窪で早期、前期、中期の土器がそれぞれ僅かに得られているにすぎない。

弥生時代 該期初頭の資料に関しては、田川のより上流側の遺跡に集中しており、田川中流域に位置する高出遺跡群付近では、後期の遺跡が分布している。丘中学校では110点のガラス玉と鉄錠を埋蔵した方形周溝墓1基が発見され、北ノ原で住居址4軒と土器、石鎌、石包丁、磨製石斧、和手で3軒の住居址と方形周溝墓3基、土器、磨製石鎌、石包丁が得られているほか、黒崖、一夜窪、北海渡、上村、裏の原、社宮寺で土器、石器類が出土している。このほか、和手の南約1kmの柴宮で銅鏡が出土し、和手の田川対岸に位置する中挾で住居址3軒と方形周溝墓4基が確認されている。

古墳・奈良時代 この時期になると、市内全体をみても確認された遺跡数はわずかなものとなっている。高出遺跡群中では、和手で8世紀を中心とした21軒の住居址が調査されているほかは遺物の採集もほとんどなされていない。田川右岸では、中挾で古墳時代の住居址10軒が確認されて

いる。

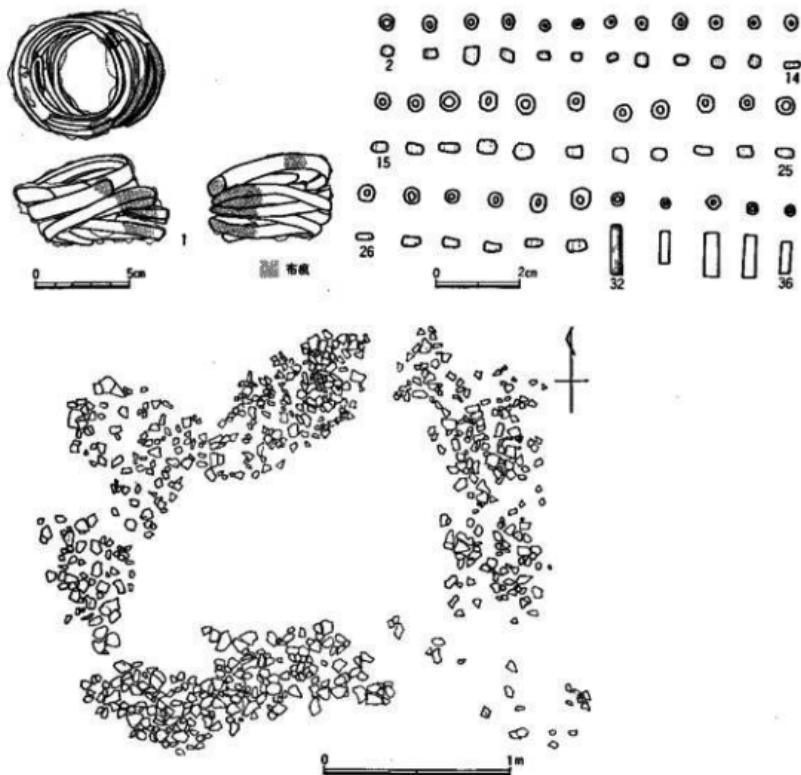
平安時代 高出遺跡群を含め、広範囲に集落が展開する時期に入る。丘中学校では36軒、上村で3軒、和手で18軒の住居址が調査され、遺物はこのほかに、黒崖、一夜窯、北海渡、古屋敷、分教場西、裏の原、社宮寺、五郎治郎で確認されている。和手対岸の中挾では56軒の住居址が調査され、田川のやや下流にあたる吉田川西で271軒、吉田向井で94軒の住居址がそれぞれ調査されている。田川流域を中心に伸張した該期里棲み大集落の様相が徐々に明らかになりつつあるといえよう。

## 第III章 遺跡の概要

### 第1節 過去の調査経過

本遺跡は戦後その存在は知られていたものの、本格的調査は校舎付属施設の建設に伴って遺構・遺物が発見されたのを端緒とする。昭和31~32年にかけ同校教諭田中守氏が注目し、藤沢宗平氏を指導者として、敷地内の6ヶ所で6軒の平安時代住居址と遺物を発見した。

その後、昭和40年、松本諏訪地区新産業都市指定区域内分布調査に際して、本遺跡を含む高出



第2図 方形周溝墓出土品(上)と環状土器集積遺構(下)(S57調査)

遺跡群一帯がその一環として対象地域となり、本遺跡を含む5地点で調査が実施された。本遺跡内では現在の音楽室東側にある塚付近を高出第1地点として調査が行なわれ、その結果、旧石器時代遺物と平安時代の住居址2軒が発見された。旧石器時代の石器はナイフ形石器終末期のもので、総計45点、剝片を加えると100点前後におよぶ。内訳は切出し形のナイフ形石器3、両面調整石器15、搔器6、彫刻器10、石刃9、石核1、礫器1、敲石1である。このうち両面調整石器は尖頭器状や半月状のものやそれらが裁断された形のもの、それに彫刻器を機能するものなどの種類がある。彫刻器も単打形・凸形整形・Z字状に、搔器も先刃・側刃・抉入状と3種に細分できる。

その後昭和15年代に入って、52年には中学校南側で野村区グランド造成工事が計画され、その事前調査では、平安時代住居址14軒が検出され、遺跡の広がりがかなり広範囲に及ぶことが確認された。

続いて57年には中学校北側の体育館建設に伴う事前調査で、方形周溝墓1基、平安時代住居址5軒、小竪穴21基、環状土器集積遺構1基が検出された。方形周溝墓は松木平における確実な発見例としては初めてのもので、古墳時代最初頭を中心とした時期の構築と思われる。出土遺物としては主体部から鉄釧1・ガラス小玉110・管玉5が発見されている。平安時代では住居址内から「○○寺」「○色寺」の墨書き土器が出土した。併せて遺構外から中世南北朝期の瓦や青銅製花瓶が出土していることから、平安時代から中世に至る寺の存在がうかがわれる。また環状土器集積遺構は2.5×2.0mのドーナツ状に、土師器鉢の破片が敷き詰められたもので、この種のものでは県内でも初見であるし、祭礼的要素が強い。

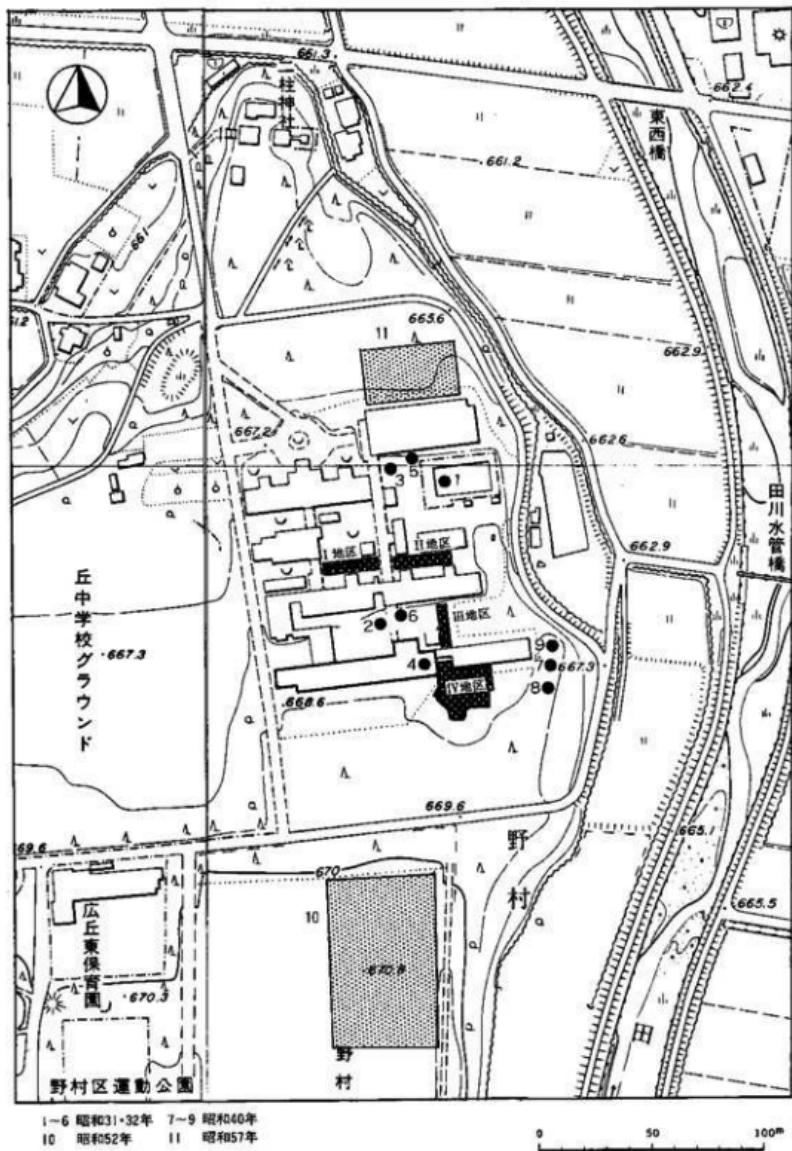
## 第2節 調査概要

丘中学校遺跡は、塩尻市広丘野村地籍にある丘中学校の敷地およびその周辺に広がっており、田川左岸の高位段丘面、いわゆる枯梗ヶ原面の最北端に立地する。今回の調査は特別教室棟などの改築工事に伴うものであり、校舎の中庭など4ヶ所（I～IV地区）の発掘調査が行なわれ、調査面積は620m<sup>2</sup>に及ぶ。

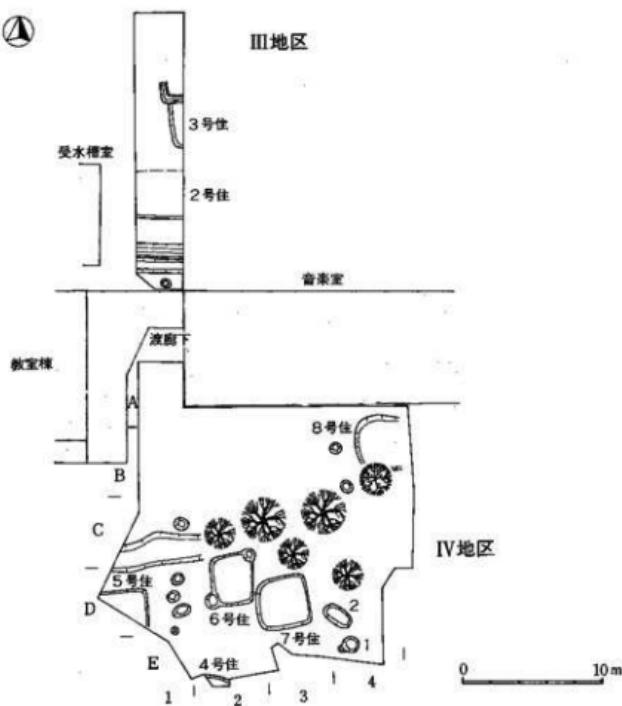
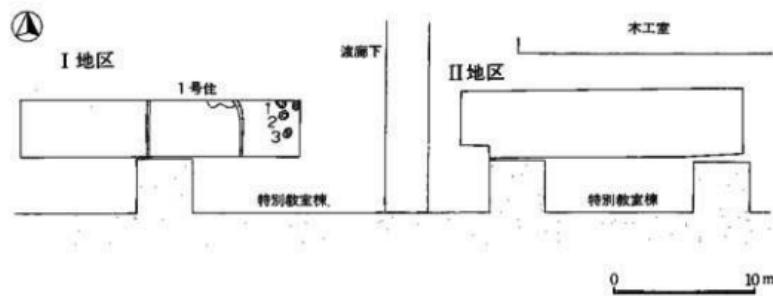
調査の結果、遺構には平安時代住居址8軒、小竪穴5基が検出され、これらの遺構に伴う土器・石器・鉄器と旧石器時代の石器が出土した。

遺構は、I地区から住居址1、小竪穴3、III地区から住居址2、IV地区から住居址5、小竪穴2が発見され、今回調査が行なわれた範囲全体にわたって平安集落が展開していたことがうかがわれる。II地区からは唯一、遺構が発見されなかったが、擾乱等により遺構が消滅してしまった可能性が高い。

出土遺物では、旧石器時代のものとして槍先型尖頭器、削器が、また平安時代では、土師器壺・甕・小形甕・鉢・須恵器壺・長頸甕・甕・灰釉陶器皿・碗・砾石・敲石・打製石斧・刀子・角釘等がある。このうち旧石器時代の資料は、最終末の神子柴系文化期の逸品で、昭和40年に同遺跡内で発見されたナイフ形石器群一括資料の出土地とも近く、注目されるものである。



第3図 丘中学校遺跡の発掘地点



第4図 全体図

## 第IV章 調査結果

### 第1節 遺構

今回の調査は校舎中庭等に設定された4地区において実施され、それぞれI地区では平安時代の住居址1軒、小竪穴3基、III地区では平安時代住居址2軒、IV地区では平安時代住居址5軒、小竪穴2基が検出された。II地区での遺構の検出は皆無であったが表土が薄く、また擾乱層も認められるところから、II地区についてはすでに削平破壊を受けている可能性がある。

遺構の分布をみてみると、ほとんど重複なく調査区全域にわたって分布している。特にIV地区の南側については遺構が密集しており、昭和52年に確認された南側の平安住居址群とのつながりを強く示唆している。

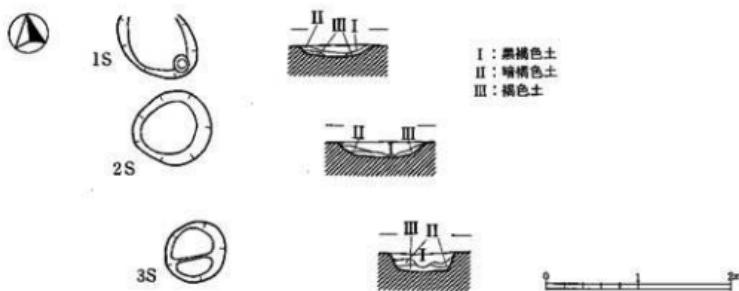
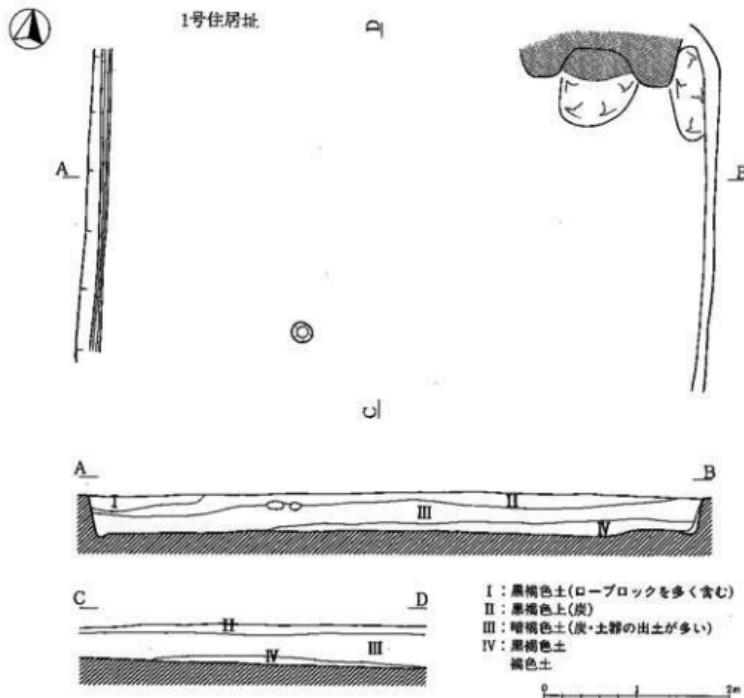
**住居址** 平安時代の住居址が8軒検出されている。全容が検出できた住居址は6号と7号の2軒のみのため、形態・規模・カマド等明らかでないものが多い。しかし確認プランから推し計ると、平面形態は隅丸方形を呈し、3~4mの小竪住居址を主体とする。唯一の例外は1号住居址で、一辺674cm、やや大型である。覆土に多量の炭を含んでいることから焼失家屋と思われ、出土遺物の僅少な今回の住居址の中では、やはり唯一例外的に多量の遺物が出土している。

**小竪穴** I地区で3基、IV地区で2基、計5基が検出された。I地区的3基はいずれも小型で浅いものである。これに対し、IV地区的ものは1号が深さ56cm、2号が72cmを測り、いずれも大型を呈する。特に2号は底面が平坦整緻で、中央に径30cm、深さ30cmの穴が穿たれており、特殊な性格を有する。いずれも出土遺物がなく時期は不明である。

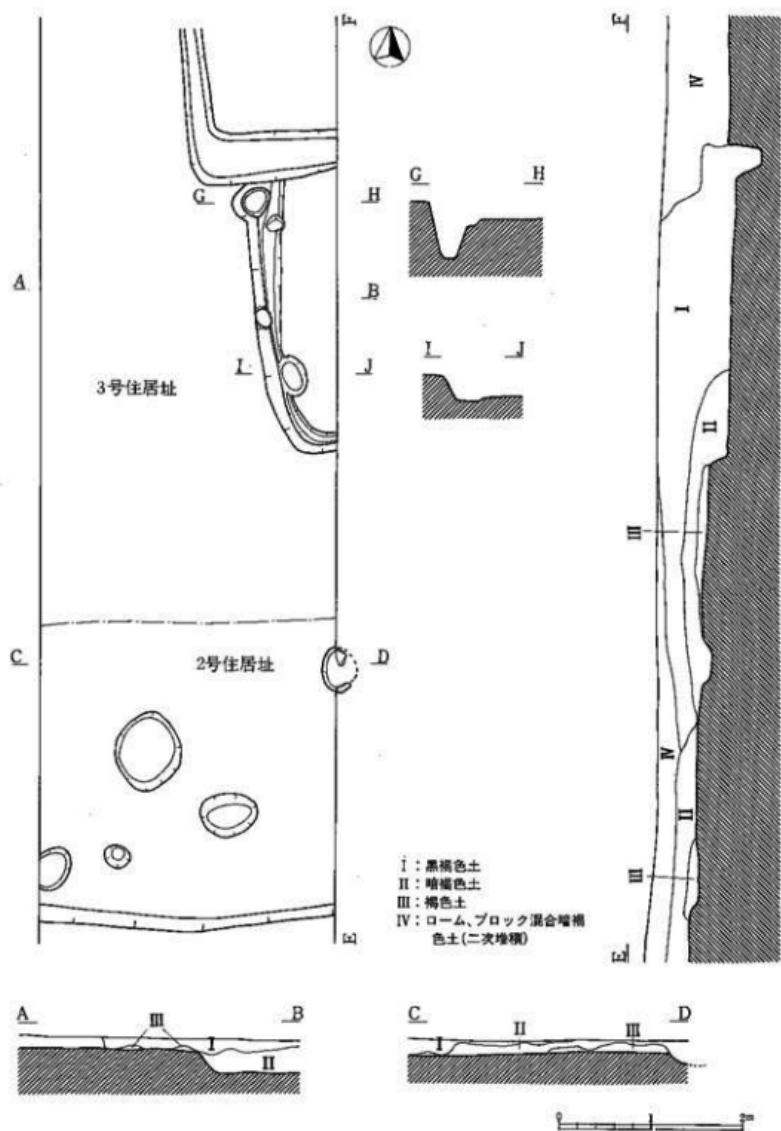
第2表 住居址一覧表

住居	発掘区	平面形	方向	規模	壁高	壁面	床面	カマド	炉位置	周溝
1	I-3-4	隅丸方形	N-80'-E	674×—	38·35·—	ほぼ垂直 凹凸著しい 堅 細	—	—	—	一部
2	III-2-3	隅丸方形	N-85'-E	—×—	—·19·—	ほぼ垂直 凹凸著しい	—	—	—	—
3	III-2	隅丸方形	N-10'-W	—×—	—·27·18·—	ほぼ垂直 平坦堅緻	—	—	—	外周
4	IV-E-2	—	—	—	—·—·—·20	ほぼ垂直 凹凸著しい	—	—	なし	なし
5	IV-D-1	方 形	N-80'-E	—×—	18·—·—·20	ほぼ垂直 平 坦	—	—	—	なし
6	IV-D-2	隅丸長方形	N-10'-W	350×290	22·24·25·15	ほぼ垂直 平 坦	—	—	—	なし
7	IV-D-3	隅丸長方形	N-15'-W	390×350	18·12·20·12	ほぼ垂直 凹凸著しい 石 團	北壁東寄 半周	—	—	なし
8	IV-B-4	隅丸方形	N-80'-E	410×—	—·22·31·32	ほぼ垂直 平坦堅緻 石 團	西壁中央	—	—	なし

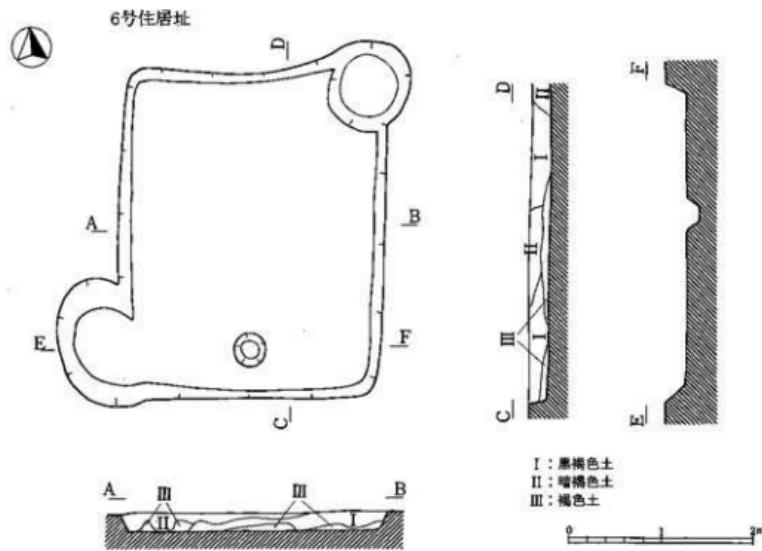
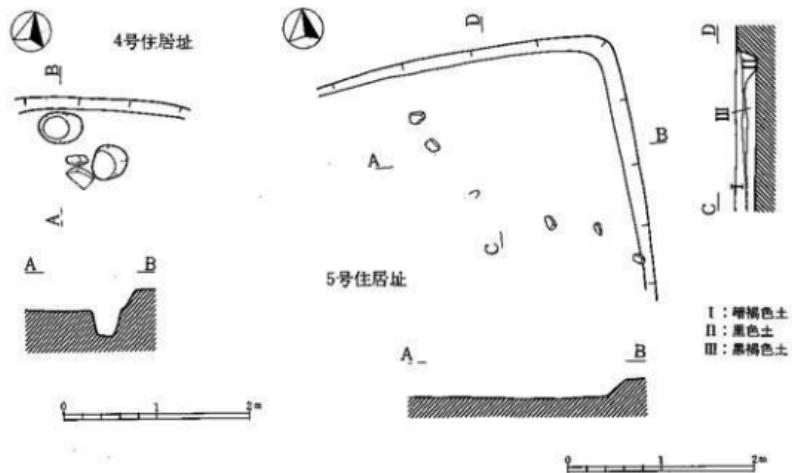
\*壁高は東・西・南・北の順



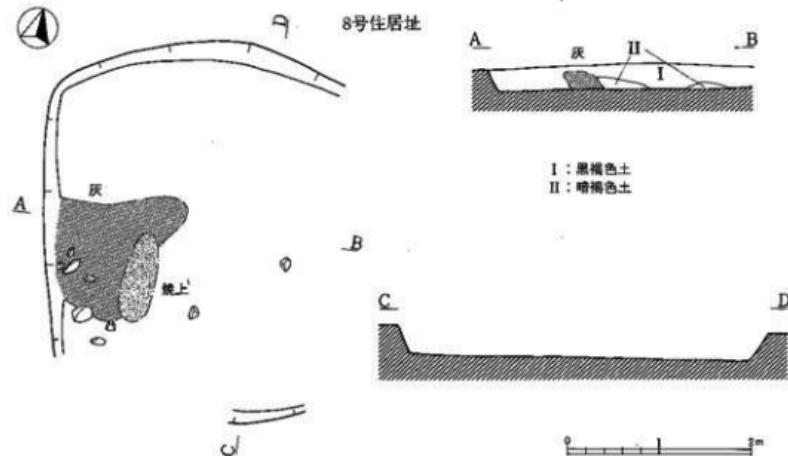
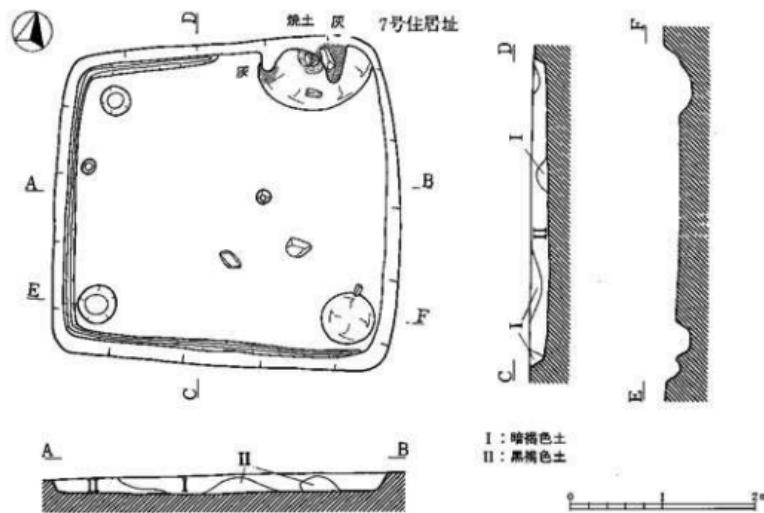
第5図 I地区(第1号住居址、1号～3号小豈穴)



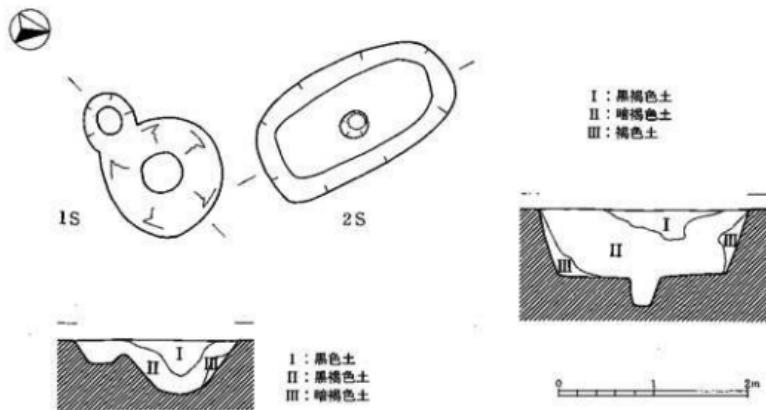
第6図 III地区(第2・3号住居址)



第7図 IV地区(第4・5・6号住居址)



第8図 IV地区(第7・8号住居址)



第9図 IV地区(1号・2号小竪穴)

第3表 小竪穴一覧表

地区	No	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
I	1	98×70	横円	N-35°-W	タライ形	78×58	平坦	12	
I	2	84×78	円	N-50°-E	タライ形	62×52	丸底	16	
I	3	65×60	円	N-65°-E	タライ形	44×30	平坦 (二穴)	19	
IV	1	130×124	円	N-45°-E	鑿鉢形	44×44	丸底	56	
IV	2	222×120	長方形	N-40°-W	タライ形	174×78	平坦	72	中央に孔がある

## 第2節 遺物

### (1) 旧石器時代

旧石器時代に属する遺物は、サイドスクレイバー1、神子柴型尖頭器1、石刀状剝片1の3点が出土した。いずれも4区の南端から出土し、ともに5mほどの間隔をもって発見された。出土層は地表下50cmのローム漸移層である。サイドスクレイバーは、シャールスタイルの縦長剝片を素材とし、打面部を基部としている。長さ13.0、幅5.4、厚さ1.2cm、重量77g。大きな弯曲の少い剝片の両側縁、とりわけ左側の縁辺に入念な調整を施している。一見するとナイフ形石器とも思われるが神子柴型尖頭器の存在を考えると神子柴系文化期所産のサイドスクレイバーと考えられる。

神子柴型尖頭器は、長さ10.8、最大幅3.2、厚さ1.2、重さ32g。白色細粒凝灰岩製。基部寄りに最大幅をもつ細身で、両端に尖頭部をもち、均整のとれた美しい尖頭器である。調整技法はすぐれ、入念な押圧剝離によりなされている。石刀状剝片は、長さ2.7、幅1.5、厚さ0.5cmの黒曜石製。

昭和40年に調査された先土器時代の遺物はナイフ形石器を主体とするものであり、今回の出土遺物は時期的に新しいものである。今回の発見によって更に時間幅のある重要な旧石器時代の遺跡であることが証明されたといえる。

### (2) 平安時代

検出された1～7号の住居址は全て平安時代に属するもので、これらの造構を中心として遺物が出土している。

第1号住居址では、図1～11が出土している。1・2は黒色土器、3～8は須恵器壺、9は土師器の小形甕、9・10は須恵器長頸瓶である。今回の検出遺構中最も遺物が豊富な住居址であった。

第2号住居址では、黒色土器壺図12と灰釉陶器壺13が出土している。

第3号住居址からは土師器壺、甕、黒色土器壺が出土している。大半が黒色土器の壺である。

第4号住居址からは、土師器壺、甕、銅釜、須恵器壺、甕、灰釉陶器壺が出土している。図14は土師器壺、15・16は灰釉陶器壺で、16は段皿である。

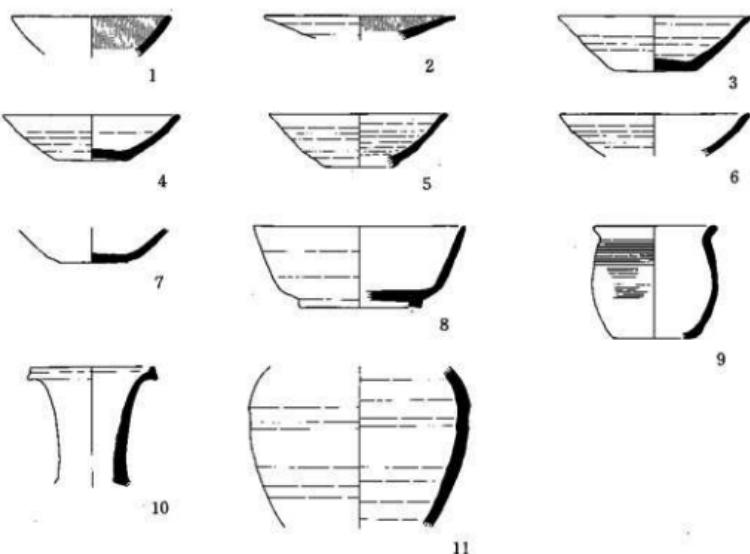
第5号住居址では、土師器壺、甕、黒色土器壺、須恵器壺、長頸瓶が出土しているが、いずれも小片である。

第6号住居址では、土師器壺、甕、須恵器壺・甕の小片が出土している。

第7号住居址からは、土師器壺、小形甕 図20、甕21、黒色土器壺17、18、短頸甕17が出土している。17は内外面とも黒色を呈し、内面はミガキが施されている。

第8号住居址からは、土師器壺、甕 図22、23、須恵器甕24、鉄鏃25が出土している。22は脚部をヘラ削りした武藏型甕、23はロクロナデ整形の小形甕である。

第1号住居址



第2号住居址

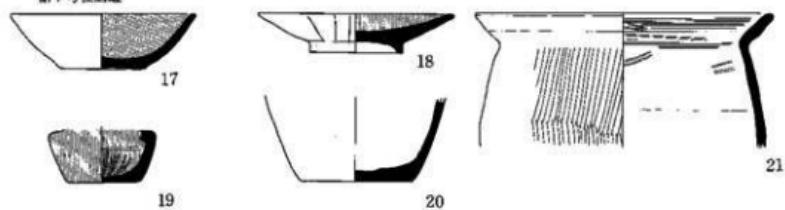


第4号住居址

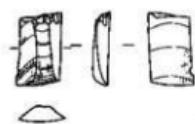
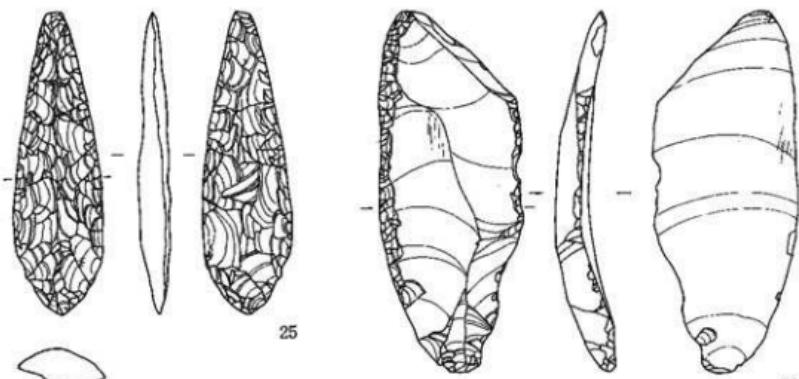
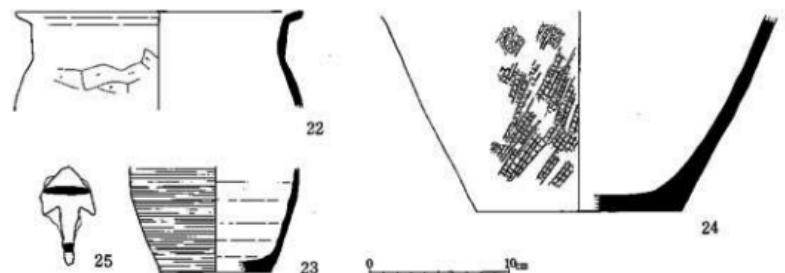


第10図 出土遺物(1)

第7号住居址



第8号住居址



第11図 出土遺物(2)

0 5cm

## 第V章 結 語

丘中学校遺跡は昭和31・32年の発掘調査を端緒に、過去4回にわたる調査が実施されており、貴重な資料を数多く提供してきた。その中には旧石器時代末期ナイフ形石器の一括資料、方形周溝墓と鉄釧、ガラス小玉の副葬品、平安時代の鉢形土器集積遺構、寺名らしい墨書き土器と仏具や瓦など県内を見回してもあまり例がない優品が数多くあり、その都度、本遺跡の重要性が高く評価してきた。

こうした背景には本遺跡の立地環境が多分に関与している。塩尻の市街地を乗せる桔梗ヶ原台地の最北端に位置し、台地下には田川・奈良井川が形成した肥沃な低地帯が広がっている。律令体制化ではこの広大な水田地帯を経済基盤として、野村・吉田向井・吉田川西などの大集落が形成されている。一方、台地の後方に目を転じれば、黒崖・一夜森・上村・和手遺跡に代表される高出遺跡群が南北3kmにわたって連続と統合しており、更にその南側には瓦塔の出土した大門遺跡、銅鏡の出土した柴宮遺跡などが控えている。かかる位置関係において、本遺跡付近は最も重要なポイントにあたり、各時代の拠点的集落の役割を果たしていたものと思われる。

今回の調査での大きな成果は、旧石器時代末神子柴型石器群の資料と平安時代の集落址の発見である。神子柴型石器群はこれまで市内では田川上流域の青木沢・柿沢・禰ノ神遺跡と高出遺跡群の北ノ原遺跡で出土しており、今回が5例目の発見である。比較的小範囲内での同石器群の密集性や今回の石器にみられる高度な製作技法など、今後の研究課題が多い。しかしナイフ形石器群に統いてのもう一つの旧石器文化の発見は、本遺跡の多様性を更に高めることとなった。

また平安時代の住居址はII地区を除く全地区に発見され、広範囲に分布していることが確認された。検出された住居址はほぼ2時期に分けられ、またこれまでの成果をみても住居址の重複がほとんどみられないことから、長くここに集落が営まれていた可能性は薄い。むしろ短期間の集落が数回程度形成されたとみるべきであろう。いずれにしても遺跡全体の中での発掘面積は極僅かであり、今後の資料の増加を待つものである。

最後に今回の発掘は、教室や渡り廊下と接した箇所で実施され、授業や学校施設等に多大な御迷惑をおかけしたわけであるが、これに深い御理解と御協力をいただいた丘中学校の浅倉校長先生、米庭教頭先生を始め、学校関係職員・生徒の皆様には深く感謝いたします。



I地区 発掘前(西側から)



I地区 重機による表土除去

図版 2



I 地区 遺構検出作業



第1号住居址 挖り下げ



第1号住居址



II地区 造構核出作業

図版 4



II地区 全景(西側から)



II地区 全景(東側から)



III地区 発掘前(北側から)



III地区 遺構検出作業



III地区 遺構掘り下げ



III地区 全景(北側から)



IV地区 発掘前(西側から)



IV地区 造構検出作業(北側から)



IV地区 造構掘り下げ(西側から)



IV地区 造構掘り下げ(東側から)



第4号住居址



第5号住居址

図 版 10



第 6 号住居址



第 7 号住居址



第8号住居址



IV地区 全景(北側から)



IV地区 全景(西側から)



IV地区 地区全景(東側から)

---

---

おかちゆうがつ こう  
『丘中学校遺跡』

塩尻市立丘中学校改築工事  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

平成4年3月16日 印刷

平成4年3月18日 発行

発行 塩尻市教育委員会  
印刷 日本ハイコム株式会社

---

---

